

源氏物語のなかの教育論

—夕霧論序説—

武原弘

乙女の巻で、夕霧は元服し、ただちに大学に入学する。元服に際して、近親者である大宮や右大将は当然四位叙任を期待し、世間もそれを予期したが、周囲の不評や反対をおしきつての源氏の処遇であつて、そこには彼の父親としての深い愛情と配慮、確固たる教育観があつたとみられるのである。いささか長い引用になるが、源氏が大宮に語る教育観について、その物語本文を引くことにする。

身づからは、九重の内に生ひ出で侍りて、世(の)中の有様も知り侍らず、夜寝、御前にさぶらひて、わづかになん、はかなき文なども、習ひ侍りし。たゞ、かしこき御手より伝へ侍りしだに、何事も、広き心を知らぬほどは、文才をまねぶにも、琴・笛の調べにも、功足らず、及ばぬところの多くなん侍りける。はかなき親にかしこき子の、勝るためしは、いと難きことになん侍れば、まして、つきく伝はりつゝ、へだりゆかんほどの行くさき、いと、後めたきによりなん、思ひ給へおきて侍る。たかき家の子として、官・かうぶり、心にかなひ、世(の)中の榮えに驕りならひぬれば、学問などに身を苦しめん事は、いと遠くなん、思ゆべかめる。さるは、戯れ遊びを好みて、心の

まゝなる官爵にのほりぬれば、時に従がふ世(の)人の、下には鼻まじろきをしつゝ、追従し、気色とりつゝ従ふ程は、おのづから、人と思えて、やむごとなき様なれど、時移り、さるべき人に立ち後れて、世おとろふる末には、人に軽めあなづらるゝに、かゝり所なき事になん侍る。猶、才を本としてこそ、大和魂の世に用ひらるゝ方も、強う侍らめ。さしあたりは、心もとなきやう侍りとも、遂の、世のおもしとなるべき心おきてをならひなば、侍らずなりなん後、うしろやすかるべきによりなん。(下略) (乙女、二一七、二一七)

しばしば論ぜられるように、夕霧に対する源氏のこのような教育観は、同時に作者式部自身その一端を示すものであり、引用文後半部「たかき家の子として」以下に、その主旨が集約され、特に「才を本としてこそ、大和魂の世に用ひらるゝ方も、強う侍らめ」という叙述が、ここでの教育論の核心を形成している。「才」は「文才」と同義で、漢学による学識を意味し、「大和魂」は世才、良識、常識的思考判断(山岸徳平氏校注古典文学大系注釈参照)を意味する。「大和魂」という語はこの物語でこの一例を見るのみで、厳密な概念規定の困難な語であるが、もっと具体的に、当時の貴族が政治家として具備すべき人格(池田亀鑑氏編「源氏物語事典」上

卷参照)と解する説もある。いずれにしても、漢学の学識教養を基本にし、それを実際の社会生活面や政治面に応用、活用してゆく「心おきて」こそが、源氏の夕霧に対して求める理想の人格であった。「和魂漢才」が成句となったのは近世に至ってからのことらしいが、平安時代にはそれなりに固有の概念体系をもった「和魂漢才」が志向されていたのであろう。

ところで、源氏の説く和魂漢才の教育論が大宮や右大将に對してかなりの説得力をもつ理由は、それが源氏自身の過去における切実な実体験に由来するところのものであったからである。宮中に生まれ育ち、世間を知らず、父桐壺帝の個人佞授を通して身につけてきた漢学や技芸には、源氏自身に基本的な素養(「広き心」は「知識」の意)の欠如もあって、不徹底な面が残ったという。そのような自身を、いま夕霧の前で「はかなき親」として認識する源氏は、学問によって親を超える子になってほしいと願っている。「たかき家の子」が、思いのままの官爵に驕り、若くして「戯れ遊びを好み」、世間の追従に自己満足しているならば、その末に親にも死別して、世間の信望も失い、「人に軽めあなづら」れるのは必定だとも説くが、あたかも他所に見る撰閲家の子息の例のごとくに装いながら、そのことばは夕霧自身、あるいは源氏自身を糾問しているものであろう。源氏は、このような懺悔に満たされた己が青春をふたたび息子夕霧に体験させてはならないという反省に立って、大学教育の重要性を説き続けるのである。

大宮や右大将のみならず、当の夕霧本人も源氏のこうした厳格な教育方針に従うことを不本意と思ひ、「いと口惜しく」「心ぐるし

う侍るなり」(乙女、二一七)と、不満の意を表明したが、源氏は断固とした姿勢で夕霧の大学入学のことを進めていく。ただちに、二条の東院の中に、夕霧の勉学のための曹司を造り、まじめで学識豊かな専任教師をつけて学問に専念させる。夕霧も源氏の期待によく応え、「ひとへに心にいれて」(乙女、二一八)学問に励み、めざましいばかりの成績をおさめ、世人を驚嘆させる。

思うに、源氏が夕霧を六位として大学に入学させ刻苦勉強させた目的は、大きくとらえて二つあったと解することができる。一は、「才を本としてこそ」の叙述にも読みとられるように、漢学を修めることによってすぐれた「世のおもし」(政治家)に大成させたいとするもの。二は、低い六位にとどめて「学問などに身を苦しめん事」を通して政治や社交の場から隔離し、「戯れ遊び」(風流事や恋愛)をさせないとするもの。教育学の理論にあてはめるなら、前者は大学教育における実質陶冶を、後者は形式陶冶を期待したものとすることができよう。いうまでもなく、理想的な教育は、両者それぞれの十全の達成とあわせて、両者の相互有機的調和的達成の裡に表現されていくものであるが、いま、夕霧における大学教育はいかなる達成を示しつつあったのか。物語世界にたちかえってみれば、そこにはいくつかの疑問が見出されてくる。夕霧は、どのような政治家を理想として、どのような理論を学んだのか。それは以後の彼の人物像とどのように関わってくるのか。さきに述べた実質陶冶の側面については、作者は詳しい造型を施していないようである。

夕霧を大学に入学させるとき、源氏は「いま二、三年を、いたづらの年に思ひなして」(乙女、二一七)という。当時の大学の在学年限は九か年であるから、山岸徳平氏が論じておられるように、夕霧の大学教育は特別な扱いとなっているのである。学生は在学期間中、位階の昇進が止まるので「いたづらの年」になるが、乙女の巻の末尾近くで、本文に「秋の司召に、かうぶり得て、侍従になりぬ」(二一七)と叙せられていて、夕霧は大学を去り、五位に叙せられていたことがわかる。続く玉鬘の巻では、彼は「中将の君」と呼ばれ、従四位下に相当する身分に昇進している。大学在学期間は一年余と考えられるが、これほどの短期間で大学教育の所期の目的が達せられると源氏は考えたのであろうか。勅試にもりっぱに合格し、進士になった夕霧の学力は秀抜であつたらうが、いささか出来過ぎの感なしとしない。

また、二条の東院の一室にこもつて、朝夕学問に専念する夕霧が、月に三度ばかりの大宮邸訪問を許され、雲居雁との幼な恋に熱中する物語の展開にも、私は注意をむけたい。相思相愛の二人の感情は日毎に昂揚していき、その仲を内大臣(昔の頭中将)に知られてしまふ。機会を得ては雲居雁を東宮妃にもしようと考えていた内大臣は、夕霧との恋を激怒し、娘を自邸に引きとることによつて、二人の仲を裂く。六位風情の学生に娘を奪われるとなると、彼の計画は根本からくずれ落ちるからである。清純な恋路を塞かれ、夕霧と雲居雁はいっそう恋情を募らせ、涙に明け暮れる日々をすごすことになる。

この夕霧と雲居雁の切々しい純愛物語は、確かな場面描写の裡に

豊かな文芸形象を獲得し、読者の感動を呼ぶものであるが、ここでいささか気になることは、二人の仲について源氏はなにも知らされず、内大臣とはちがつて、なんらの干渉的な言動をとっていない。内大臣が大宮の監督不行き届きを激しく難じたのとは事情を異にしてはいるものの、大学での学問に精進一途のはずの夕霧を指導監督する立場にある源氏に、物語の作者は遠慮深げである。鬱積した胸中を晴らすために、夕霧はひそかに紫の上の部屋近くに出かけ、惟光の娘に懸想したりもするが、源氏のいう「戯れ遊び」に近い夕霧のこうした行動を、源氏は知らないものであろうか。あるいは、その程度の色好みは黙認したのであろうか。

源氏は、しかし、玉鬘と紫の上に対する夕霧の行動には注意をほらい、監視をおこたらない。玉鬘は美の姉として紹介し、紫の上は夕霧に見えない所、手の届かない距離に置こうとする。が、野分の巻で、源氏の知らない所で、夕霧の秘められた恋情からの熱い視線が紫の上の艶容を射て、六条院の内部に崩壊の危機が迫る。が、彼はついに行動の人とはならず、視る人の世界を超えなかつた。その後、玉鬘の素姓を知つて求愛し、他方に紫の上に対する恋情をも捨てきれず懊惱するが、藤裏葉の巻に至つて、雲居雁との長年にわたる恋が成就することになり、幸福を得るのである。

ここまでの物語本文をたどつてみて、夕霧の人物像についてのひとまずの要約を得たい。彼の人格には、大学教育を基根とする「まめやか」「すく／＼し」の要因と、雲居雁との幼な恋を端緒とする「すき」の要因とが同時共存し、作用しているように私には考えられる。両者は、物語の情況や場面に即応して自在な顕現を示すが、

總体的に見れば前者が強く、結局は情念に身を委ねて極端な行動をとるといふことはなく、まじめである。本文にも「すく〜」（胡蝶、二一〇）「いと、もの〜しく、まめやかにものしたまふ君」（螢、二一四）「才の際もまさり、心用ひ雄々しく、すくよかに足らひたり」（藤裏葉、三一〇）などの形容で叙述され、とりたてて指摘される欠点は見当たらない。ただ、すでに見てきたように、女性に対する好色心を発動させることはあり、理性によってそれを抑制しながらも、情念の長い持続に自ら苦しむことがある。そのような「好色心」が、後の落葉宮との恋に陥る夕霧の原質となるのである。

さて、野村精一氏によると、源氏が語った教育観が夕霧の人格に実現可能であったかどうかを疑問視され、「少なくとも、源氏物語内部における以降の夕霧像では何とも言いかねる。偶発的、時評的発言と考えてよいのだろうか」とされるが、私見によれば、その教育観に導かれた夕霧の大学入学のことは、以降の夕霧像および物語世界の内部構造に多大の作用を及ぼしたと考えられる。

三

夕霧の大学入学のとき、源氏がその位を六位としたことは重大であった。その折の源氏の見解については先に見たとおりであるが、いまひとつ重要なことは、そのことによって夕霧と雲居雁の純愛が決定的にひき裂かれたことである。東宮妃にもしようと考えている娘の前に現われた恋人が六位の学生では、父内大臣の失望と怒りも当然であった。わが権勢拡大の決め手ともなる雲居雁を、内大臣は夕霧に渡すことはできない。しかも、夕霧の父源氏とは、かつて冷

泉帝妃競争で梅壺女御が弘徽殿女御を退けたという一件を終えており、強い対抗意識がある。今度だけは負けられぬというのが、内大臣の心境であった。

「かたち・有様よりはじめて、ひとしき人、あるべきかは」（乙女、二一九）と見る大宮の夕霧を、内大臣も嫌いなのではない。が、六位では相手にならない。「人の御程の、すこし物〜しくなりなんに、かたはならず見な（して）、その程、心ざしの深さあさゝのおもむきをも見定めて、ゆるすとも、ことさらなるやうにもてなしてこそあらめ」（同、二二〇）という内大臣の思わくも、あながち偽りだったわけでもない。が、いまは許せなかった。

大宮のはからいで、夕霧と雲居雁は最後の対面の機会を与えられた。幼い恋人たちは、ただ〜泣いた。そのとき、夕霧は雲居雁の乳母の「六位宿世よ」というつぶやき声を耳にして、激しい悲しみに襲われた。「くれなるの涙にふかき袖の色を浅みどりにや言ひしをるべき」——六位が着る浅葱の袍の袖も、いまだ雲居雁を想う血の涙で紅く染まっているはずなのに、と夕霧は涙んで別れるのである。以来、彼は浅葱の袍を着るのがつらかった。あの乳母のつぶやきを聞いたときの無念さ、恥しき、屈辱感を、彼はかた時も忘れ去ることができず、ふさぎこむ毎日が続いた。「六位など、あなづり侍るめれば、しばしの事とは思ひ給ふれど、うちへ参るも、物うくてなむ」（同、二二五）大宮を訪ねて、夕霧は涙ながらに語る。雲居雁のこと以上に、六位に対する周囲の軽侮がつらかった。劣等意識、孤独感が彼の全身に広がり、このようにして彼の日常は、無気力とも落ちつきとも判然しない彼の性格をなませたのである。

ただ、雲居雁への恋慕の情は絶えることがなく、また、嚴父の監督下で學問を続けることは変わらなかつた。「おほかたの人がらまめやかに、あだめきたる所なくおはずれば、いとよく念じて、いかでさるべき文ども疾く読みはてて、まじらひもし、世にも出でたゝん」(同、二一八頁)と精勵する夕霧が、源氏の教育方針をどれほどまでに深く理解していたかは、やはり疑問となる点ではあるが、「六位」がもたらした沈思と発奮であるならば、それもひとつの教育効果であつたにちがいない。

夕霧が六位にとどまっていた期間が、それほど長くなかつたことは前節で触れた。藤裏葉の巻で、中納言にまで昇進した彼は、「ひかりいとゝまさり給へる、さま・かたちよりはじめて、飽かぬことなきを」(三一〇頁)と称賛され、雲居雁との結婚も許されたいま、晴れやかに微笑することができた。かつて、「六位宿世」と自分を軽侮した乳母に、夕霧は「あさみどり若葉の菊を露にても濃き紫の色とかけきや」と詠みかけ、「からかりしをりの一言葉こそ、忘れぬ」(三一〇頁)と皮肉な詞を付加するのである。

「六位」をめぐる夕霧と雲居雁の恋の破綻、展開、終結の物語構成、源氏と内大臣との對抗と和解の転末照応を見つめるならば、夕霧の大学入学のことから語りはじめる乙女の巻の、作品構造上においてしめる位置と役割の重要性に気づくのであるが、その「六位」を物語描写に導きこむ直接の契機が、源氏の教育観の中に用意されていたことに注目すべきである。

さきにも述べたように、「六位」をめぐるそのような物語展開のなかで、夕霧像の内実が語り明かされていくことを思うとき、夕霧

の大学への入学、またそれをもたらした源氏の教育論の、物語世界内部における存在意義も大きいとしてよい。

確かに、源氏の教育論の内容そのものが夕霧像に実現されているかどうか、また、彼が大学で学んだ漢学の教養とはいかなる内容のもので、それが夕霧像のどの部分に結実しているのか、という問題は残る。ただ、私はいま、夕霧の大学への入学が、だれに、なぜ、どのような影響を及ぼしたかという物語構造論の観点から、第一歩を少しく考察してみたのである。

注1 今井泰子氏「和魂洋才・和魂漢才・やまとだましひ」(「文學」昭和50・7、9)参照。

注2 山岸徳平氏「源氏物語の教育観」(「源氏物語講座」第五巻、昭46・9)

注3 野村精一氏「少女」(「源氏物語必携」昭53・12)
物語本文の引用は古典文学大系本により、()内に巻名、巻数、ページ数を記した。

(梅光女学院短期大学教授)